問題意識を持たせ、自主学習力をたかめる試み

——一九九三年度高校二年生「国語Ⅱ」における実践——

橋本　二三男

はじめに

生徒の文字離れ・活字離れが叫ばれし久しく、ついには、マンガも含めて読書活動を考えようという昨今である。国語の授業も旧態依然した展開では多くは居眠りと私語の部屋と化すのが実情ではなかろか。

それでは、国語で取り扱う内容にまったく興味関心を無くしてしまっているかというとそうでなく、むしろ、生き方について何かを悩み、求めている生徒が現代多くなってきているし、興味関心を持つ私的なことには熱中する。感性にしても、詩に曲づけさせたりCMのコピーを作らせたりすれば、光るものを出してくる。ただ、興味関心が分散し、受け身で、考えることを面倒くさがり、読書力の格差もますます開いていて、国語の授業を困難なものにしている。

この興味関心をどのように組織し、どのようにして問題意識にまで高め、自ら学ぶことの喜びを体験させるかが今日の「国語教室」の課題の一つとなっていると思う。知識もさることながら、大学においても期待される学生像は、この点にあるのではなかろうか。

以下の実践は純然な単元学習ではないが、一九九四年度から本校二年で、「国語表現」を半学級の小クラスにして取り組む計画があることから、その手がかりを得たいと思って行ったもので、教科書教材から発展させていく方法をとっている。

一、評論での展開

教材A、「『におい』の子供史」（本多和子）

［要旨］

調理法の近代化に伴って、夕暮れの町には甘辛いにおいが漂うようになった。このにおいは、明治の子どもたちにとって一日の遊びの終わりを告げる「しるし」であり、「家」と「家族」とを想起させるものであった。一方では電灯の普及によって、家族の真ん中に置かれていた行灯やランプのにおいが消え、子どもたちは母から離れて一人寝を強いられ、孤独で不安な夜を送ることになった。現代では、インスタント食品の普及によって、味覚が画一化するとともに、無数のにおいが消えつつある。そこから育った子どもたちの「無臭愛」は、彼らの在り方をまさに一変させてしまった。

教材B、随想「東の音、西の音」（武満　徹）

学習計画（約一〇時間）**と展開**

目標　「現在、失ったものと得たものを調べ、そのことが我々の生き方にとって、どのような意味を持っているかを探求する。」

① 評論を読んで、副題をつける。（2時間）

この教材での学習課題は、「題名と副題とで内容の核心部分が分かるようにせよ。」の一問だけとした。比較的難解語句もないので、いきなり黙読で要点をメモしつつ副題を作る作業を課した。

疑問を発する机間巡視を経て、五人程度の副題を板書。部分からとらえたもの、要点をつないだ長文のものもあるが、多くは

『におい』の子供史
無臭を愛する子供たち

の類いである。

「これではいつの時代の子どもたちのことなのか分からない。時代は？　根拠は？　子どもたちは？　……」と指名発表させつつ、構造読み・主題読みを文図で板書し、

『におい』の子供史
無臭を愛する時代へ
（無機化への流れ、無臭時代としての現代　など）

に至った。

② 教材Bを音読し、筆者が発見した事柄の意味を考え、身近なところではどんな点が挙げられるか考える。（一時間）

③ まず学習目標に対して、自分として探求したいことがらを持つ。それを班内で出し合って、班としてのテーマを決める。どういう項目をどういう調べ方をすればよいか話し合い、全員どれかの項目を分担する。（1時間。班構成は座席の七、八名）

④ 班の共同探求テーマについて、図書室で調べてまとめる。（2時間）

授業者は書架のところにいて、資料探しの生徒と対応した。「資料がない」といって来るほとんどは、自分のテーマ通りの書名で探している。筆者や目次、文学作品中からも探すことを指示。

⑤ 班ごとに各自の分担部分（ワークシート1）と班のまとめ（口頭）とを発表する。（約3時間）

あらかじめ司会・板書などの係りを決めてあったが、予想以上に時間を要して2時間の予定が3時間かかった。

発表要領は、簡潔に次の三点とした。

ア、昔と今の違い　イ、資料（根拠）の説明　ウ、考察と感想

五クラス、計三〇班が選んだテーマは、次の通りである。なか

には、3の「ロバのパン屋」の発表の日、京都新聞朝刊で「ロバのパン物語」の著者を紹介した記事や、1の参考になる、京都教育大の先生主催の「親子遊び塾」の記事、10に関係する「旬の野菜――季節感の乱れに危機感」といった特集などが載った、という幸運にも恵まれて、俄然、活気づいた発表となっていった。

テーマと選んだ班数

1「子供の遊び」（八班。外から内へ。手作りからファミコンへ）
2「食事に関するもの」（五班。団欒から個別化へ）
3「おやつ・お菓子」（三班。手作りからお金へ）
4「家屋」（二班。和式から洋風へ）
5「服装」（二班。和装から洋装へ）
6「交通」（二班。ゆとりからスピード化へ）
7「買物」（二班。世間話から無言へ）
8「テレビ番組」（内容よりも視聴率へ）
9「父親像」（厳しさから優しさへ）
10「季節感」（あらゆるものの無季時代へ）
11「人権」（まだ残る差別・偏見・陰湿化へ）
12「家庭用品」（素朴さから電子レンジへ）
13「色彩感覚」（抽象的なものの感性言語へ）

［ワークシートNo.1の発表原稿］抄例

探求ワークシートNo.1　高校二年七組　田中景子

単元目標「私たちの子供の頃（または親から聞いた、本で読んだ昔のこと）と比較して、現在、失ったものと得たものとを調べ、そのことが今の私たちにとってどんな意味をもつか探求する。

☆私として探求したいテーマ

「ロバのパン屋」とは、そもそもどんなものだったのだろう。

☆その理由

「ロバのパン物語」という本が、テレビで紹介されているのを見て、とても興味を持ったので。

☆第二班のテーマ　「お菓子」

目	1和菓子（野洲）	5ケーキ（吉村）
項	2あめ細工（荒木）	6アイスクリーム（小室）
査	3ポン菓子（松本）	7ジュース（滝内）
調	4ロバのパン屋（田中）	

☆私の担当項目　「ロバのパン屋さん」

☆資料（調べた作品・文献・記事の核心部分）

「ロバのパン物語」から

ロバのパンのことはもう古い記憶になってしまった。ロバが引く馬車に蒸しパンを満載して、町から村へパン売りのおじさんが出没した時期がかつてあった。昭和三十年代のことである。

♪ロバのおじさんチンカラリン　チンカラリンロンやってくる……。当時このテーマソングが遠くから聞こえてくると、子どもたちは遊びも宿題も放り出し、親にお金を無心した。そして十円玉を握りしめ、大急ぎで歌の聞こえる方角を目指して一目散に走った。

……（後略）……

☆探求　（私が考えた今日的意味の要旨）

ロバのパン屋が売っていたのは、今も売っている一個七十円くらいの蒸しパンだそうです。現代では、正直いって蒸しパンなんて珍しくもなく、ロバのパン屋でなくても買えます。ほかにも卵や砂糖がだっぷりと入ったケーキ、チョコレートだってバナナだってすぐに買え、別に贅沢品ではありません。本当に世の中が豊かになったんだなあ…と改めて思います。しかし、それとともに子供達（私も含めて）の舌は肥え、贅沢になっています。

……（中略）……

現在、ロバ（馬）で売りにくるパン屋さんはなくなりましたが、「ロバがおいしいパンを運んできてくれる……。」と待つなんて、なんと夢があるでしょう。昔の子供達には、おなか一杯になるくらいのおやつはなかったでしょうが、こういう夢があったと思います。反対に、現代は豊かなあまり、欲しいものは直ぐに手に入るようになって、こういう夢を子供達は持たなくなったのではないでしょうか。

⑥［ワークシートNo.2「学習のまとめ」の記入（1時間）］

単元「現代失ったものと得たものの意味」まとめ

二年一組　三班　岩橋雅晃

☆自分の班のテーマで発見した内容・反省

今回の調査で発見したことは、現代流の遊び（代表的なものとしてはテレビゲーム）が、子供達に深刻な影響を与えていると言うことである。それはいろいろとあるが、まず体力の低下だ。これは遊び場所が無くなったというものも一つだが、室内で遊ぶことができる道具の普及が大きく関与していると思われる。そして、協調性・自立性・創造性の欠乏が上げられる。これは遊び仲間がいないからで、言い方を変えれ

ば、遊び道具を遊び仲間にしていると言えるのではないだろうか。

☆他の班の発表で印象的であった内容（または反論）

五班の発表の中で、「独りで家に閉じこもってテレビばかり見ていると、人間関係はできないが自立性は生まれる。という意見があったが、これに対して疑問を持った。人間関係に問題が出てくるというのは同感だが、自主性が生まれる」というのは大変おかしい。なぜなら、多くの人々とのつながりや関係の中で協調性を育て、そのうえではじめて自立性を問われるからであって、単に独りで部屋にこもり、テレビを見て得られるものは自立性ではなく、孤独であろう。

つまり、現代の子供達の遊び方においては、協調性どころか自立性も養えないのだ。

⑦学習の反省会（1時間）

ワークシートNo.1とNo.2を一点ずつ、および全員のNo.2から特徴点を一枚にまとめたもの（省略）によって、根拠、現代的意味、発表要領を中心に学習総括を行った。

二、小説での展開

教材　A、「山月記」（中島　敦）

B、「待つ」（太宰　治）

C、「蘭」（竹西寛子）

D、「蛍川」（宮本　輝）

学習計画　（約十一時間）

目標　「おもしろい小説がどうして文学なのか」

① 「山月記」を読み（再会するまでを斉読し、以下黙読）、初発感想を書いて提出。（一斉→個別学習3時間）

ア、率直な初発感想

イ、作者の意図

ウ、疑問点

エ、この作品を読んで思い浮かべる実在の人物

② 場面ごとに、初発感想での感想や疑問点を中心に読解。（一斉学習3時間）

ここでは、明らかに読み間違っている点を論証することにとどめ、疑問点を明確にして次の課題に取り組む中で深めることとした。

③ 各自の読解を発展的にまとめる作業。（個別または同一テーマでの共同学習で2時間）

「『山月記』学習ワークシート」例

小説『山月記』を読んで、自分が更に深く知りたい問題、素晴らしいと思った点を、次の、共通課題のほかに一つ選んで考え、まとめよう。

1、共通課題「『李徴』はなぜ虎になったのか。」

2、「構成・文体・表現」から。

3、この小説の素材となった『人虎伝』との比較から。

4、『山月記』の続編で。

5、作者の意図を考える。

6、作者の「生い立ち・境遇」から。

7、数人による「群読」で。

8、一場面を「戯曲」で。

9、このような生き方をした「実際の人物」を挙げて。

10、『山月記』と他の『変身小説』との比較から。

11、その他の面から。

私のテーマ

二年　　組　　番氏名

A、共通課題のまとめ

……（　省略　）……

B、私のテーマのまとめ（作品）

……（作品省略）……

この様式で、なぜそう言えるのかの根拠を外さないように、と指示して取り組ませた。

特徴点

1の共通課題については「臆病な自尊心・尊大な羞恥心」と「愛の欠如」とを挙げた生徒がほとんどで、授業者のねらった「芸術を志す者の苦悩」はクラスに二～三名であった。

2、「場面ごとの自称語の変化」「風景描写」。

3、最初、圧倒的に多数であったが、「書き下し文」を与えた途端に激減した。授業者が解説しなければならなかった。

4、「李徴の息子が父の遺骨を求め、真相を知る」「やがて愛に目覚めた李徴が人間に戻り、ふるさとで平和に暮らす家族を遠くから眺め、満足してどこへともなく去っていく」、逆に「李徴を説得しようとした者のすべてが食い殺されてしまう」内容のもの。

5および6は、セットにして考えたものが多く、作者と李徴とを重ね合わせたものが多かった。

7を選んだ生徒は皆無。

8では、「若き李徴が大官といさかいを起こし、決然と飛び出す場面」。

9、「ナポレオン」「豊臣秀吉」「ゴッホ」など。

授業者のイメージする「中原中也」などは出てこなかった。

10では、カフカの「変身」や安部公房の作品。

11では、劇画が出てくるかと期待したが皆無であった。

④　③のまとめ（作品）をクラスごと、課題ごとに一例プリントして、一斉学習。（2時間）
煩雑な作業となったが、原典に即しながら合評し合った。

⑤　教材ＢＣＤの三編を黙読し、「なぜ『文学』なのか」を考える。（個別→一斉学習　1時間）
実際は家庭での読みを宿題として展開し、宮本輝のことば「人間の幸せってなんだろう」で締め括った。

三、詩歌教材で

教材　Ａ「短歌」十九首　Ｂ「俳句」十二句

目標　「作品をイメージ豊かに鑑賞するとともに、各自のイメージを口語の短詩形で表現する。」

学習計画　（約六時間）

①　「日本の詩歌のリズム」
古代歌謡からニューミュージックまでをプリントでたどる。

②　教科書の「短歌」「俳句」を授業者が範読し、文法的注釈を入れながら直訳のみ行う。（短歌朗詠を入れる。）

③　各自一首を選び、そのイメージを詳しく叙述する。

④　そのイメージから、原作の味わいを損なわないように留意して、意訳した口語短歌を作る。

［生徒の作品］例

☆　歌人の作品
萱ざうの小さき萌を見てをれば胸のあたりがうれしくなりぬ
生徒作品

枯れ草の中に芽を吹く忘れ草勇気を出して生きろと教える

☆　歌人の作品
草づたふ朝の蛍よみじかかるわれのいのちを死なしむなゆめ
生徒作品

生き物は短い命というけれど蛍よわたしは燃えて死にたい

☆　歌人の短歌
垂乳根の母が釣りたる青蚊帳をすがしといねつたるみたれども
生徒作品

年寄って腰も曲がった母親に世話をやかせる病気のわたしは
（以下省略）

⑤　各自一句を選び、原作の味わいを損なわないように留意して、そのイメージから口語自由詩を作る。

［生徒の作品］例

○
すずめ
めだか
からす
「いつになったら眠るの」
「からす　からすからだよ　お母さん」
すいか
か……か　か？
「もうおしまい」
かもめ
「お母さんの番」
←

降り積もった雪の中を
転げ回り
雪を固めて
放り投げ
ひとしきり
遊び疲れて帰ってくる。
病院の庭に降る雪は
もう
どれほど積もったろう。
←

咳の子のなぞなぞあそびきりもなや　（汀女）

○
窓から差し込む光が
私の病床を白いベールでつつみ
静まり返った時のなかで
幼児となった私は
野原に出かけていく。

いくたびも雪の深さを尋ねけり　（子規）

○
元日の昼下がり
雪かき寄せて羽根をつく
晴れ着の君がまぶしい
コトン　と
打ち上げた君の羽根が
真っ青な空に
天女のように舞った
見とれた僕の額に
君は

問題意識を持たせ、自主学習力をたかめる試み

ドボリ　と墨を塗った
←

大空に羽子の白妙とどまれり　（虚子）

（以下省略）

これらの生徒作品は、いくつか板書させ、合評し合っているうちに、二人のものを一つの詩にしたりしてまとまったものである。小説（『山月記』）の場合もそうであるが、特に詩歌の場合、表現されていることばから作者が沈黙している部分を想像するところに、文学のおもしろさや味わいが滲み出てくるということを、生徒たちは体験したようである。

四、授業を終えて

①アンケート調査から

生徒の反応で授業するわけではないが、参考にするため、このような学習方法についてどの様に感じているかを調査した。その代表的な意見は次の通りである。

A、「よいとするもの」74％

○　教科書の文章だけなら、それしか理解できなかったが、発展的に学習することで国語の神髄を見たような気がした。

○　今まで先生の話を聞いているだけだったが、自分で考えて授業を受けるようになった。面倒くさいが力がつく。

○　自分で調べること、他人の発表や意見には一生懸命になるので、問題意識が高まったし、受け身な私にはいいと思った。

B、「よくないとするもの」6％

○　深めるといっても、自分が思うというのは個人差があり、あまりよくない。

○　この方法は面倒くさい。教科書の内容もよく分からなかったので、発展学習と言われてもと思った。

○　質は高いと思うが、なにも調べたいと思わなかった。押しつけは止めてほしい。

C、「よいと思うが不安とするもの」8％

○　いろいろなことが学べてよいが、定期テストに直接関係していないので、勉強しにくい。

○　テスト前、教科書の文章についてどこを押さえておくべきか分かりにくいので、あまりよくない。

○　国語を楽しむのにはいいが、テストとか実力がついているのかなどを考えると不安だ。

（残り12％は、「なんともいえない」および無回答。）

②課題

非常に生き生きと取り組み、自分の力で資料から発見してまとめる楽しさを体験したように思う。しかし、初めて担当した学年で八クラスの内五クラスにいきなり四月当初から始めたので無理もあった。「単元学習」をめざす上から、いくつかを私の教訓としたい。

ア、資料の集め方やまとめ方、発表・討論の訓練を、単元学習をすすめる初期の段階から積み上げる必要がある。ある教材で、ある時期だけ実践しても効果はうすい。文字・音声活動の三つの分野、「理解活動」「批評活動」「表現活動」の視点から、年間計画あるいは三年間の展開計画の下に、国語科教師集団が協同研究しつつ進めるとき、これらの活動の中心にある「内言形成活動」が活発化し、次第に、生徒の学ぶ姿勢や学力観も変革することが期待できるであろう。また、社会性がまだ十分でない段階（中学校段階）では、あまり多くのことを期待せず、基本的なことに重点を置くのがよいのではなかろうか。

イ、担当者が資料を準備したり図書室と事前に連携したりすることが必要であるが、高校レベルではその範囲をはるかに超える。公の施設の利用、他教科との連携も視野にいれて準備、展開するといった行動的な教材研究・学習が望まれる。

ウ、現代の高校生は、授業や生徒個人および班の発表に対してよほどの自由な雰囲気でもない限り、質問したり反論したりしない。最後のまとめのところで、かなり重要な質問や反論を記述したりする。人の前では恥をかきたくない、かかしたくないという自意識が働くのである。これは思春期、男女共学によって助長されている面はあっても、昨今ではそれ以前に過敏な子が多くなっている。低次元の取り決め（例えば「質問、発言の多い班には発表点を加算する。」）であっても、そのことを口実にして、かえって、そんなことが目的でない自然な人間関係の雰囲気ができたりすることがある。

また、「いま感性があぶない」といわれているものも、こうした側面も一つであろう。文学作品にしてもその中に込められている情感を汲み取ることが苦手で、自意識が絶対であって、「人はそれぞれ」なのである。詩歌のところで、作者が沈黙している部分をどんどんイメージ化することを課したのも、こうした思いがあったからである。

エ、この学習方法は、一人一人が主体的に学習に取り組め、教師の方も個別指導が容易である点が特徴であるが旧態依然とした知識偏重の評価方法ではやがて破綻する。形成評価の重視、総括評価の多面化が必要となってくる。つまり、教師の側の意識変革が不可欠であろう。

（はしもと・ふみお　立命館高校）